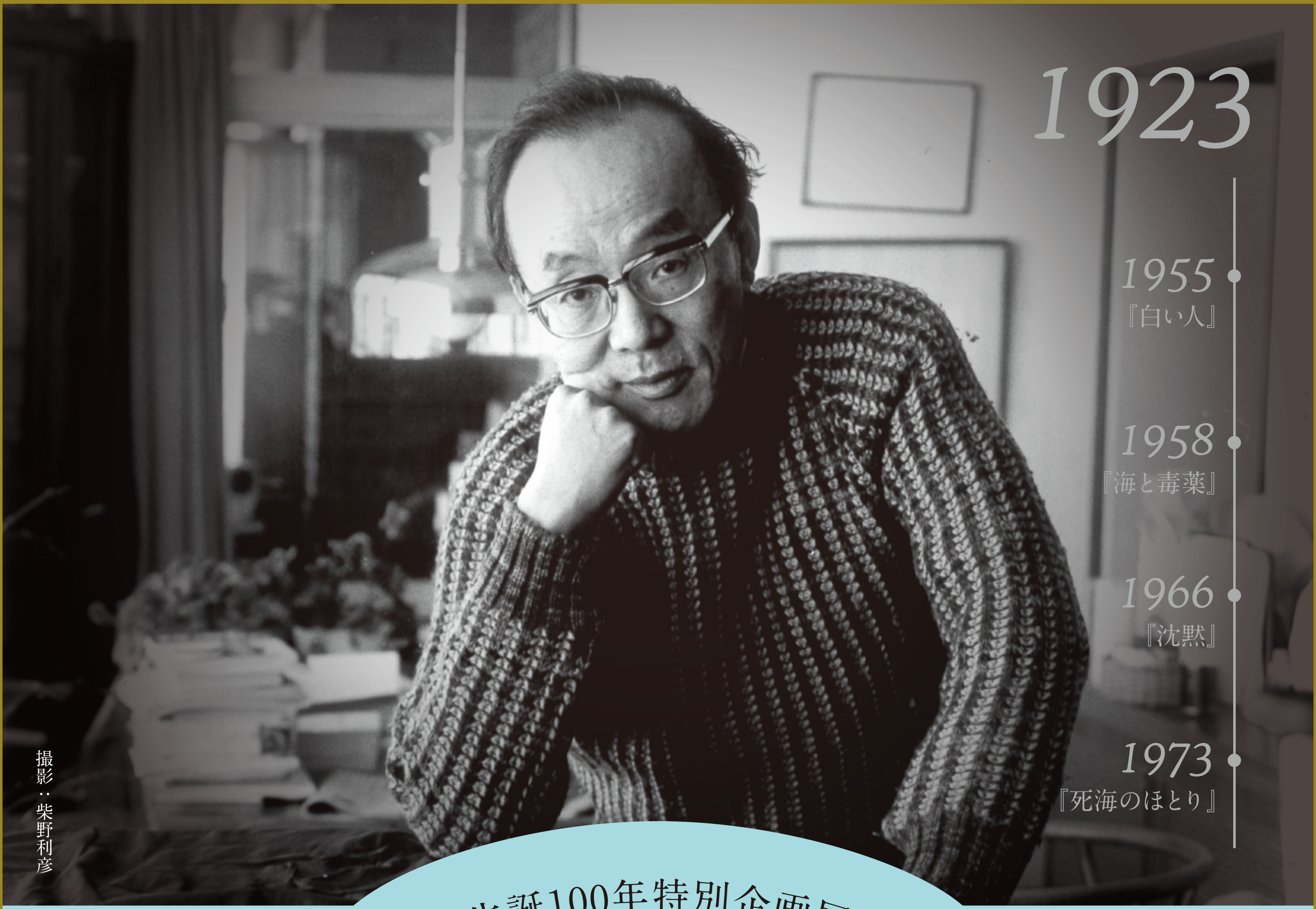


撮影・柴野利彦

1923

1955 『白い人』

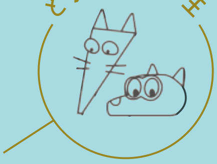
1958 『海と毒薬』

1966 『沈黙』

1973 『死海のほとり』

生誕100年特別企画展

100歳の遠藤周作に出会う



1980 『侍』

1986 『スキャンダル』

1993 『深い河』

2023

2023 3/27(月) → 2024 9/26(木)

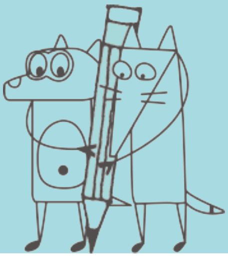
開館時間　午前9時〜午後5時(入館受付は午後4時30分まで)
※企画展初日は午後1時オープン

休 館 日　12月29日〜1月3日

料　　金　一般 360(260)円、小・中・高校生 200(100)円
( )内は 10 名以上の団体料金

場　　所　長崎市遠藤周作文学館

かなり、うまく、生きた



遠藤周作 生誕100th
沈黙と好奇心の旅へ
ENDO SHUSAKU LITERARY MUSEUM

お問合せ
長崎市遠藤周作文学館
〒851-2327 長崎市東出津町77番地
TEL 0959-37-6011 FAX 0959-25-1443

●主催 長崎市　●協力 周作クラブ・周作クラブ長崎

公式SNSと特設サイトで情報発信中！

Instagram　twitter　web

よく学び、よく遊んだ人生。

一人の小説家の文学と生涯、その100年の歩みを辿る。

生誕100年特別企画展

100歳の遠藤周作に出会う

人生に対して結論が出てしまい、迷いが去ってしまっているならば、われわれは小説を書く必要がない。小説家は迷いに迷っているような人間なんです。暗闇の中で迷いながら、手探りで少しずつでも人生の謎に迫っていきたいと小説を書いているのです。

——『人生の踏絵』

遠藤周作（1923〜1996）は、1955年（昭和30）に「白い人」で芥川賞を受賞し、「沈黙」「深い河」など宗教を主題とした作品を書き、多くの読者に感動を与えました。また、「狐狸庵もの」などのエッセイやエンターテイメント作品、歴史小説、戯曲など、多岐にわたるジャンルで活躍しました。「日本人のキリスト教受容」という信仰の問題が中心的なテーマでありながら、多くの読者を獲得してきたのは、遠藤文学の根底にある、人間の弱さへの共感、人間の哀しみに寄り添う心があるからです。今もなお、新たな作品が刊行され、現代の読者の心を揺さぶる遠藤文学の灯（ともしび）は消えることがありません。生誕100年を記念して開催する本展では、遠藤周作の文学と生涯を代表的な純文学作品「沈黙」「死海のほとり」「侍」「スキャンダル」「深い河」を中心に辿り、現在まで続く遠藤文学の広がりを紹介するほか、ライフワークというべき「劇団樹座」「宇宙棋院」などのユニークな活動も紹介し、遠藤周作の全貌に迫ります。

1984年十六番館（当時）の踏絵の前で
（提供：文藝春秋）

1964年に長崎を訪れた際に見た踏絵が小説「沈黙」を書く動機となった。踏絵に遺された黒い足指の跡が遠藤の心を揺さぶった。

狐狸庵（こりあん）先生
（撮影：旧日本土木工業協会）

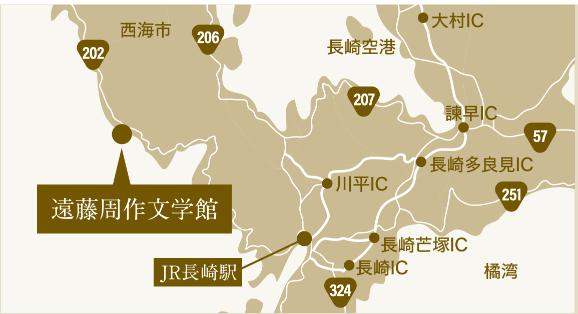
遠藤は自らを「狐狸庵山人」と名乗りユーモアエッセイを書いた。メディア等でも幅広く活躍し「狐狸庵先生」という名でも親しまれた。

母の形見のマリア像

遠藤は12歳の時に母にならってキリスト教の洗礼をうけ、その信仰はのちに生涯をかけて追究する文学テーマとなった。

『影に対して』
（新潮社、2020・10）

2020年に遠藤周作文学館の寄託資料から発見された未発表小説。遠藤文学の背景にある遠藤と父母との関係の核心に触れた作品。



ACCESS

長崎市遠藤周作文学館

〒851-2327 長崎市東出津町77番地
TEL 0959-37-6011 FAX 0959-25-1443

JR長崎駅から　長崎バス「桜の里ターミナル（大瀬戸・板の浦）」行き乗車。「桜の里ターミナル」で、さいかい交通「大瀬戸・板の浦」行きに乗換え、「道の駅（文学館入口）」下車。約75分

遠藤周作文学館
ホームページ